東南アジア研究　23巻4号　1986年3月

ウジュン・パンダンのトラジャ社会：インドネシア地方都市研究

山　下　晋　司*

The Toraja Community in Ujung Pandang: A Study on a Local City in Indonesia

Shinji YAMASHITA*

Most studies on Southeast Asian cities have emphasized the capital cities (or "primate cities"), which are the cornerstones of their nation-building, while local cities have not received due attention. One of the basic assumptions underlying the present study is that a theoretical model can be built which will prove fruitful in the study of "middle-scale society." While we already have a "micro" (conventional anthropological) model based on data from rural areas, and a "macro" model deriving from the sociological studies of metropolitan areas, we do not have an efficient model with which we can deal with societies of intermediate scale and complexity. Such a model or theory is of crucial importance for the understanding of the current social processes of Southeast Asian countries, since local middle-scale societies constitute the frontlines as well as the centers of regional development.

As part of a larger research project on the local cities in Southeast Asia, this paper focuses on the city of Ujung Pandang in South Sulawesi, Indonesia, where I did a four-month fieldwork in 1983–1984. The city, known as Makassar before 1971, developed as an international port town from the sixteenth century, and is now the regional administrative, economic and cultural center with a population of approximately 700,000. Ethnic multiplicity is a fundamental characteristic of the city. Within the setting of this "ethnic mosaic," the present paper focuses particularly on the Toraja migrants whose homeland is located 300 kilometers north of the city, and examines their communities in the fringe "*kampong*" sector of the city. Though the history of their *merantau* ("migration") to the city goes back to the 1920s, it has been accelerated since 1965, internally by ecological pressures in their homeland, and externally by the political stability and the improvement of land communication under the Suharto regime. Their migration can be considered as a sort of "ethnic expansion" taking place within the framework of Indonesia's modernization. The Toraja migrants' experiences of the city described and analysed in the paper illustrate some aspects of the socio-cultural dynamics of the present Indonesian local cities.

From the Toraja migrants' point of view, the city is not a well-integrated "moral community." Despite the physical existence of the city of Ujung Pandang, there seems to be no Ujung Pandang society or Ujung Pandang culture as a whole: what there is is an assemblage of miniature ethnic societies of South Sulawesi, such as the "Toraja community" and the "Bugis community." This feature of the "ethnic mosaic" or "pluralism" is apparently inconsistent with the socio-cultural model of conventional ("functionalist") social scientists. "Middle-scale society," being located

* 広島大学総合科学部；Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University, 1-1-89 Higashisenda-machi, Naka-ku, Hiroshima 730, Japan

between the nation as an ideological moral community and rural society as a substantial moral community, presents a different social type from either. I posit it deserves special attention in our quest for a better understanding of urban societies in Southeast Asia.

I　問題の所在と限定

本論では，インドネシアの地方都市，南スラウェシ州のウジュン・パンダン市がとりあげられ，社会人類学的な観点から，この都市の社会的動態に関する一側面が検討される。最初に，インドネシアあるいは広く東南アジアの「地方都市」をとりあげる理由を，二つほど示しておこう。

第1に，従来の東南アジア地域の都市研究においては，国家の中心，国家建設の礎である首都，あるいは「首位都市」(“primate city”) の研究に焦点がおかれてきた傾向があった。これに対して，地方の都市もしくは地方の中心に関しては，しかるべき注意が払われてきたとはいえず，われわれはこの地域の地方都市に関するデータを基本的に欠いている。にもかかわらず，地方都市は，今日の東南アジアの社会的・文化的動態を理解するうえで，きわめて重要なものになりつつある。というのも，現在，国の「開発」が強調されるなかで，地方都市は，地域開発の前線であり，拠点でもあるわけだからである。

第2に，地方都市に焦点をあわせることによって，「中規模社会」とでも呼ぶべき社会のモデルを構築することができないかという理論的な可能性に関してである。すなわち，地方都市社会は，政治学や経済学が研究の対象としてきたマクロな国家レヴェルの社会でもなく，人類学が伝統的に好んでとりあげてきたミクロな村落レヴェルの社会でもない。このマクロ社会学もミクロ社会学も扱ってこなかったタイプの社会，ここでいう「中規模社会」に関する研究は，したがって，理論的にはマクロモデルあるいはミクロモデルとは異なった社会モデルを構築することを期待できる興味深い研究領域としてある。その意味で，この種の社会を研究することは，今日の社会科学のモデル構成にとってきわめて野心的な課題であると予測されるのである。

こうした関心のもとに，1983年から84年にかけて，東南アジアの地方都市社会に関する研究プロジェクトが組まれ，スリランカ，フィリピン，およびここで報告するインドネシアにおいて現地調査が行われたわけであった。[1)]

この調査との関連において，インドネシアの地方都市をとりあげる際の問題点に若干触れておこう。インドネシアの場合，地方都市に関する研究が少ないといっても，ギアツによるジャワ [Geertz, C. 1965] や，ブルナーによるスマトラおよびジャワ [Bruner 1973; 1974] の地方都市についての優れた研究がある。しかし，インドネシアの「多様性」を考える時，ジャワやスマトラの事例をもってインドネシアの地方都市を代表させるわけにはゆかない。こうしたことから，上記のプロジェクトにおいては，ジャワ，スマトラ以外の二つの都市，南カリマンタンのバンジャールマシンと本論で考察の対象とする南スラウェシのウジュン・パンダンが選択された。次に，

1) 1983および84年度の文部省科学研究費補助金による調査（「東南アジア地方都市社会研究（代表青木保大阪大学教授）」）。インドネシアに関しては，筆者と岐阜大学の内堀基光のふたりが予備調査（1983年12月-1984年1月）を行なったのち，筆者は1984年の7月から10月にかけて南スラウェシのウジュン・パンダンにおいて，内堀は1984年の8月から1985年の1月にかけて南カリマンタンのバンジャールマシンにおいて本調査を実施した。

地方，あるいは地方都市といってもさまざまなレヴェルがあるが，インドネシアの場合，「州」(*propinsi*) という単位とその中心である「州都」(*ibu kota propinsi*) が重要であるように思える。というのは，現在27にわかれるこの州を単位として，インドネシア政府はこの国の多様なる地方文化を整序しようとしているからである。[2] 調査が行われた上記の二つの都市は，いずれも南カリマンタン州あるいは南スラウェシ州の州都である。

この調査は，また，各調査都市の(1)後背地との関係，(2)市場，(3)大衆文化の3点をめぐって行われたわけであるが，ここで検討するのは，特に第1の点に関することである。この都市とその後背地との関係という問題を検討するにあたって，筆者がウジュン・パンダンという都市を選んだのは，前述の理由に加えて，1976年以来の筆者の調査研究——スラウェシ島内陸山地部のプロト・マレー系民族集団トラジャ社会の研究——の延長としてだということがある。[3] 本論で述べるように，1960年代後半以降，トラジャのホームランドではいわゆる「ムランタウ」(*merantau*, 出稼ぎ) 現象[4] が顕著にみられ，筆者はこのトラジャの人々を追うように，この都市に引き寄せられたのである [山下　1985a]。したがって，本論では，とりわけウジュン・パンダンのトラジャ人社会を検討するという限定のなかで，インドネシアの地方都市の社会的・文化的動態の一端を明らかにしてみよう。[5] しかし，その前に，この課題にとっての舞台であるウジュン・パンダンという都市について言及しておかなければならない。

II　舞台：ウジュン・パンダン市

歴史的背景

この町は，1971年まではマカッサルという名で知られ，マカッサルは，16世紀にはすでに今日のインドネシアの東部と西部，あるい

2) 例えば，1970年代のはじめに作られた「美しきインドネシアのミニアチュア公園」(*Taman Mini Indonesia Indah*) という名をもつジャカルタの野外博物館は，インドネシアの文化の多様なる全体を南カリマンタンとか北スマトラといった各州ごとに展示しようと試みている。この場合，各州の文化は，その州を特徴づける民族の慣習家屋の形をした博物館そのものに象徴されつつ，館内の展示品のなかに示されている。さらに，1970年代末に発足した「文化庁歴史伝承局」(Direktorat Jenderal Kebudayaan, Direktorat Sejarah dan Nilai Tradisional) は，現在特定の州（例えば，ジョクジャカルタ特別区や南スラウェシ州）において「地域文化の調査および記録プロジェクト」(Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah) を推進し，州単位の「地域文化」(*kebudayaan daerah*) を本の形で記録しようと試みている。この「記録」は，それ自体は「学術的」な性質のものであるが，それが政治と結びつく時，「国民文化」を作り出すワンステップとしての「地域（州）文化」を創出する作業として位置づけられるように思われる。

3) 1976年から78年にかけての調査は，文部省アジア諸国派遣留学生（1975年度）制度による筆者のインドネシア大学滞在中に，16カ月間にわたりトラジャのホームランドであるタナ・トラジャ県において行われた。

4) ムランタウを「出稼ぎ」と訳すのは，明らかにその意を狭めすぎている。「外界」(ランタウ) へ出るというのが原義である。トラジャ語でムランタウにあたる語は，"*male lako tondok tau*" (他者の国へ行く)，"*male mambela*" (遠くへ行く)，あるいは "*ma'somba* (*ma'sompa*)" (航行する) などである。

5) ウジュン・パンダンのトラジャ人については，1975-1976年にかけてノーイ＝パームとマトゥラダらが初次的な調査を行なっている [Nooy-Palm, Mattulada *et al.* 1978]。また，インドネシア政府文化庁プロジェクトの一環として，パナンランギ・ハミッドらがこの町のトラジャ人の家族関係に関する調査を行なっている [Hamid, P. *et al.* 1984]。パナンランギ・ハミッドは，筆者の1984年度の調査の助手を勤めた。

は広くインドネシアと西欧をつなぐ，いわゆる香料貿易の国際的な交易都市として有名であった。すなわち，この町は，当時のマカッサル人の二つの王国，ゴア（Goa）王国とタロ（Tallo）王国の貿易港として発展したわけである [Mattulada 1982: 9–11]。インドネシア／東南アジアには，都市の発展類型として，一般的に(1)王都，(2)港市，(3)植民都市の3類型が認められるが，この町の生成は第2の類型に属し，ジャワ海を囲むいわゆる「パシシール」(*pasisir*) 文化——ジャワ北岸，スラウェシ南岸，カリマンタン南岸，スマトラ南東岸——に属する港湾都市の一つとして発展したと考えられる。この港湾商業都市としての伝統は今日にいたるまで受け継がれており，人々はこの町をまずもって「プラブハン」(*pelabuhan*, 港）あるいは「コタ・ダガン」(*kota dagang*, 商業の町）と形容する。

アンソニー・レイドによると，1640年代のゴア／タロ王国の最盛時には，この都市——現在の町より6–7キロメートル南のゴア王国の「首都」ソンバ・オプ（Somba Opu）にその中心があったとされる——の人口は，10万人を越えたと推定される。当時，この都市は，砦もしくは「城壁」(*benteng*, ベンテン）に囲まれ，王宮と貴族たちの居住地，王の倉庫，モスク（1605年にタロ王国がスラウェシではじめて，公式にイスラム教を受容している），二つの市場，ポルトガル人，グジャラート人，デンマーク人，オランダ人，イギリス人，マレー人，ワジョ（ブギス）人などの居住区などをもち，国際交易港としての輝かしい繁栄ぶりが窺える。けれども，この町は，オランダとの抗争のなか，最終的には1669年に破壊され，かつて外敵に対して作られていた砦の一つ（ベンテン・ウジュン・パンダン——現在の町の中心部に位置し，その一部は今日でもみることができる）は，「フォート・ロッテルダム」と改名される（この砦は，ソンバ・オプ陥落に先立つ1667年に，いわゆる「ブンガヤ協定」のもと，オランダの領有するところとなっていた)。この新しい「オランダ人の町」の人口は2,000人をきり（1688年），かつて繁栄した都市も小さな市場町に転落している [Reid 1981a: 145; 1981b]。

こうした歴史的な盛衰のなかで，この都市がかつての繁栄をとり戻すのは19世紀以後だといわれる。とりわけ，1906年に，この町は本格化するオランダ植民地体制下にあって，スラウェシならびに東部インドネシアの植民地行政の拠点として，「植民都市」として新たな展開をとげることになる。[6] この時点で，この町の人口は，26,000人。そのうち，ヨーロッパ人が1,000人，中国人が4,600人，「東洋系」（アラブ人，インド人など）が200人といわれ，人口の4分の1弱が，外国人によって占められている（なかでも中国人が大きな位置を占めている点に注意)。1916年には，外国人の数は，町の人口の半数を占めたといわれる [*Encyclopedia van Nederlandsch-Indië II* 1918: 645]。インドネシアの独立後，この都市は南スラウェシの地方行政の中心というばかりでなく，東部インドネシアの最大の都市として発展してゆくことになる。因に，この都市の今世紀の人口推移をみておくと，1930年には，84,900人 [加納 1982：40]，独立当時，約100,000人 [Forbes 1980: 2]，1961年，384,200人 [加納 1982]，1971年，434,766人 [Reksohadiprodjo 1984: 15]，1981年，712,219人 [*ibid.*]，である。したがって，今日，この都市は人口70万以上をかかえ，

6) よく知られているように，オランダ植民地行政が「外領」にまで貫徹してゆくのは，19世紀の後半，スラウェシにおいては20世紀に入ってからである。すなわち，"Gemeente Makassar"（マカッサル市）は，1906年4月1日付で発足し，当時のセレベス州の州都 (hoofdplaats) となった [Kota Makassar 1956: 20]。

人口規模では，ジャカルタ，スラバヤ，バンドン，メダン，スマラン，パレンバンに次いで，インドネシア全国で第7位である。この点で，この町は「地方都市」といっても，「大都市」（メトロポール）としての性格をある程度そなえている。[7)]

今日のウジュン・パンダン市

1971年に都市名がマカッサルからウジュン・パンダンに変更された時，都市の区域も拡大されている。すなわち，1971年までは21平方キロメートル（およそ東西2キロ南北10キロ）であった市街地は，現在その約5倍（114.23平方キロメートル）に拡げられている（したがって，1971年以降のこの都市の人口増加の一つの要因として，この市街地の拡大という点も考慮すべきであろう）。これが現在の「コタ・マディア」（*kota madya*，都市自治体）ウジュン・パンダンである。こうして，現在のウジュン・パンダン市は，1971年に加えられた東部の三つ（Biringkanaya, Panakkukang，および Tamalate）の「区」（*kecamatan*）を含め，行政的に11の「区」にわかれる（図1）。

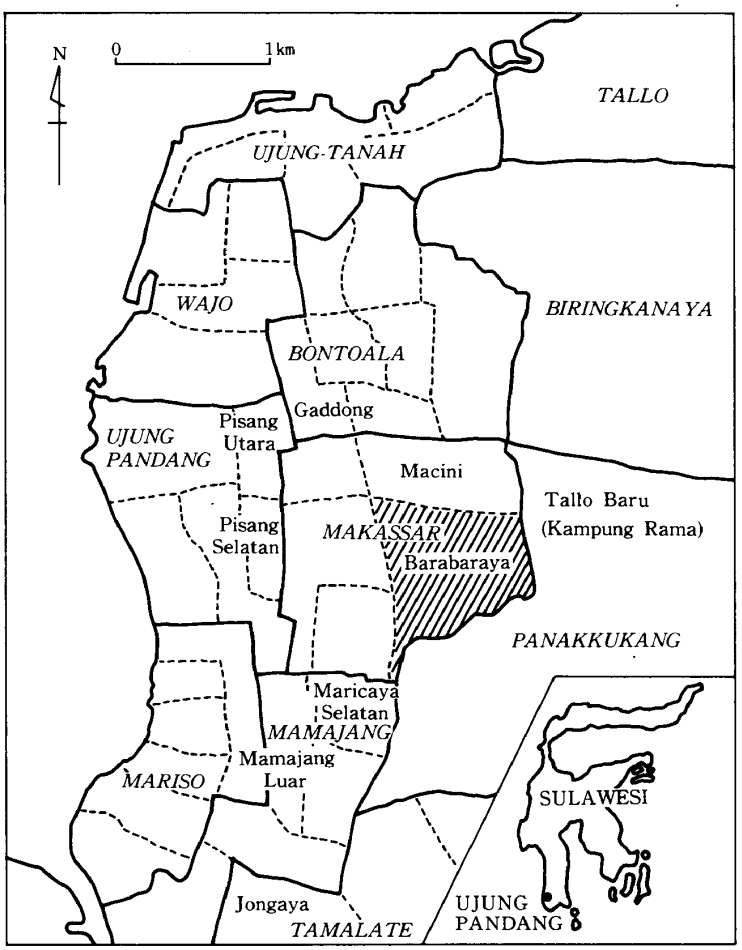

図1　ウジュン・パンダン市*

——— ：区（*kecamatan*）境
----- ：地区（*kelurahan*）境
//////// ：主要調査地区
*名を入れた地区（*kelurahan*）にはまとまったトラジャ人コミュニティが見出される。

ところで，インドネシアの都市を三つの基本的なセクター，(1)行政区，(2)商業区，(3)「カンポン」（*kampong*）と呼ばれる村落部からの流入民の居住区の各セクターから観察することができるとし，これらのセクターの検討を通して東部ジャワのある町の社会史を考察したのは，ギアツである [Geertz, C. 1965]。この視点はウジュン・パンダンという町をみる場合も，さしあたっては有効である。

図2を参照しながらみてゆこう。ウジュン・パンダン市の行政セクターは，ベンテン，つまりかつてのフォート・ロッテルダム[8)]

7) ヒルドレッド・ギアツは，1960年代はじめのインドネシアの都市を，「大都市」(metropoles) と「地方都市」(provincial towns) の二つのタイプにわけている [Geertz, H. 1963: 34]。この分類のなかでは，ウジュン・パンダン（当時はマカッサル）は，「大都市」のカテゴリーに入れられている。

8) 「ベンテン」（砦）はこの町の重要なシンボルとして，「船」——港町ウジュン・パンダンを象徴——とともに，市の紋章のモティーフを

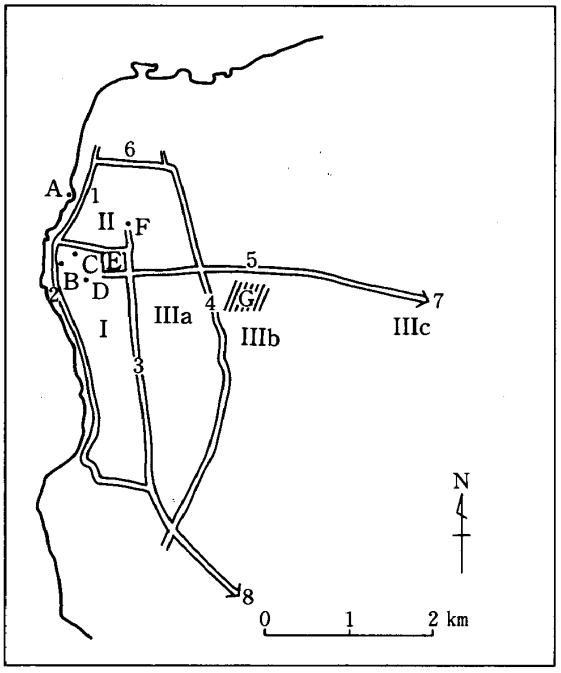

図2　ウジュン・パンダン市の社会地図

I　：行政セクター（官庁街・エリート居住区）
II　：商業セクター（華人地区）
IIIa：旧カンポン・セクター
　b：新カンポン・セクター
　c：新々カンポン・セクター
A　：港
B　：ベンテン（フォート・ロッテルダム）
C　：州役場
D　：市役所
E　：カレボシ広場
F　：中央市場
G　：主要調査地区（バラバラヤ地区）
1　：Jalan Nusantara
2　：Jalan Penghibur-Rajawali
3　：Jalan Jenderal Sudirman-Dr. Ratulangi'
4　：Jalan Veteran（旧市街地境界）
5　：Jalan G. Bawakaraeng-Gowa Jaya
6　：Jalan Seram
7　：Maros へ
8　：Sunggu Minasa (Kabupaten Gowa) へ
(Jalan は「通り」の意)

の周辺に見出される。この地区には，市の儀礼・集会が行われる大きな広場 (Lapangan Karebosi)，州役場，市役所をはじめとする政府関係の役所が並び，その南側はこの町の一等地で，高級住宅地になっている。かつてのオランダ人居住区である。建物も瀟洒なコロニアル・スタイルで，この地区は，かつての植民地時代の記憶をとどめる空間として，あるいは現在のインドネシア人エリートたちの居住区としてある。

その北側，港を中心とした部分は，最も繁華な商業地区を構成している。中央市場 (Pasar Sentral)，銀行，シーフード・レストラン，それに各種の商店 (*toko*) が並ぶ。この部分は，「カンポン・チナ」(*Kampong Cina*) と別称され，華人が多く住んでいる。他のインドネシアの都市と同様，この町の商業・経済部門は華人が握っている。いわゆる「近代都市」の経済を特徴づける工業部門は，この町では依然未成熟で，就業構造においてこの部門は10%をきるといわれる (cf. Forbes [1979: 3])。

単純化していえば，この二つのセクターをとり巻くように市の東側に，庶民の居住区，つまり「カンポン」が広がっている。この町は港を中心に東に発展しており [McTaggart 1976: 76 peta 3]，これとともにこのカンポン部分が村落部から流入してくる人々を吸収し，新たなカンポンを形成しつつ，ますます大きくなるわけである。本論で考察の対象とするトラジャ人の移住民社会が見出されるのも，この部分においてである。

エスニック・モザイク

ウジュン・パンダンは，元来はマカッサル人の居住地域に位置していたが，すでにみたように，歴史的な盛衰はあれ，16世紀以来のインターエスニックな国際交易都市として発展してきたわけで，現在もこの町はさまざまな民族集団から構成されている。もっとも，インドネシアにおいては現在民族集団ごとの人口統計がとられていないので，この町の民

構成している。ベンテンの内部は現在「南スラウェシ文化センター」として博物館として使われている。

族構成について正確なことはわからない。けれども，出身地によってある程度の数はつかむことができ，ハサヌディン大学（ウジュン・パンダン市）の社会学者ハッサン・ワリノノらが1970年代前半に行なった調査からその数字を挙げてみると，次のようである。ウジュン・パンダン生まれ(42.6%)，ブギス（25.7%)，マカッサル（12.5%)，トラジャ（4.4%)，ドゥリ（2.7%)，マンダル（1.6%)，南スラウェシ州以外（8.8%)，外国人／華人(1.9%) [Walinono *et al.* 1974: II 7–8]。この数字は厳密なものだとはいえないだろうが，それでもこの町のエスニック・モザイクに関するいくつかの問題点を映し出している。

第1に，ウジュン・パンダン以外で生まれた人が過半数を越えることは，この町が「移住民社会」(migrant society, cf. McGee [1967: 84]) であることを示している。第2に，ブギス，マカッサル，トラジャ，ドゥリ，マンダルは南スラウェシを構成する基本的な民族集団であるが，今日マカッサル人よりもブギス人がマジョリティの位置を占めつつある。[9] 第3に，この町は，インターエスニックな性格を示すといっても，前述のワリノノらの調査によると，現在南スラウェシの出身者が90%近くを占めている。この点で，かつての「国際性」はむしろ弱まり，インドネシアの国としての成熟のなかでこの町は地方（州）の中心としての性格を強く示している。ついでにいえば，南スラウェシ州以外の住民としては，メナド人などのスラウェシの他の州の出身者，アンボン人，フローレス人といったモルッカ諸島や東インドネシアからの住民，またバリ人，ジャワ人，ミナンカバウ人，バタック人といったジャワやスマトラからの移住者も見出される。

Ⅲ　ウジュン・パンダンのトラジャ社会

主要調査対象：バラバラヤ地区のトラジャ社会

筆者が住込み調査によってある程度インテンシヴな研究を行うことができたのは，マカッサル区 (Kecamatan Makassar)，なかでもバラバラヤと呼ばれる地区 (Kelurahan Barabaraya) である。この地区はちょうど旧市街と新市街をわかつ「フェテラン通り」(Jalan Veteran) のすぐ東側に位置し（図2），1960年以降藪や沼地であった部分を宅地化してできた新しいカンポン・セクターである。住宅事情は概して悪く，町のなかでも貧しい人々の居住区に属する (cf. McTaggart [1976: 81 peta 4])。ここを住込み地点および調査地域として選んだのは，ここにこの町のトラジャ社会の一つが見出されるからである。今日，ウジュン・パンダンには6–7万人のトラジャ人が住むと推定され，[10] 彼らはある程度かたまって住む傾向にあるので，市内のいく

9) おそらく，これが都市名改正の理由の一つであると思われる。すなわち，この町はもはや「マカッサル人」の町ではない，と。マカッサル人は，ちょうどジャカルタ(バタヴィア)の「原住民」であった「バタウィ人」のように，移住者に土地を奪われ（あるいは売り），市の周辺に後退していったという。他方，ウジュン・パンダンすなわち「みのばヤシ (*pandan*) の岬」は，行政セクターの中心的シンボルである「ベンテン」（フォート・ロッテルダム）付近の地名に由来するとされるが，これもオランダの植民地臭を強く残しているわけで，この都市名改正を批判するむきも多い [Reid 1981b]。

10) 本文中に挙げたワリノノらのウジュン・パンダンの民族集団別の人口比は，トラジャに関しては低すぎる評定だと思われる。ノーイ＝パームとマトゥラダらは，1975–1976年の時点で，ウジュン・パンダンのトラジャ人を5–6万人，当時の市人口の約10%と推定している [Nooy-Palm, Mattulada *et al.* 1978: 2]。

つかの地区にこうしたトラジャ人のコミュニティが見出される。例えば，(1) 1920–1950年の比較的古い時期に形成されたものとして，Gaddong, Pisang Utara, Pisang Selatan, Maricaya Selatan に，(2) 1950–1970年の比較的新しい時期に形成されたものとして，Mamajang Luar, Jongaya, Macini, およびここでとりあげる Barabaraya に，さらに (3) 1970年代後半から1980年代にかけての最も新しい時期に属するものとして，Panakkukang 区に属する新市街のはずれ (Tallo Baru 地区，Kampung Rama と通称される) に見出される (図2)。現在，古いコミュニティの住民が，特に上記第3の新しい地区に安い土地と家屋を求めて移動しているのが観察される。旧市街の周辺部から新市街の周辺部への移動である。

バラバラヤ地区にトラジャ人が多いといっても，彼らは当然他の民族集団から孤立して生活しているわけではない。この地区の住民——25,937人，4,420世帯 (1983年統計 [Kecamatan Makassar 1984])——は，他の地区と同様，ポリエスニックに構成されている。しかしながら，この地区の下位単位である九つの *R.W.* (*Rukun Wilayah*)[11] という居住区のレヴェルでみてゆくと，程度の問題ではあるが，例えば，*R.W.* 1 ではマカッサル人が，*R.W.* 3と8ではドゥリ人が，*R.W.* 5 ではブギス人が，そして *R.W.* 2 と *R.W.* 4 ではトラジャ人が，まとまって住んでいるという傾向が認められる。

調査資料について一言しておく。この調査では，住み込むことによって，自ずと収集できる情報を別にして，基本的に二つのタイプの資料を得た。一つは，居住区長 (*kepala R.W.*) の保管する「住民票」(*kartu penduduk*) ——世帯主 (*kepala keluarga*) ごとに出身地，生年月日，職業，宗教，家族構成，当該地区への転入年などが記載されている (住民票の作成は，ウジュン・パンダン市では，1978年の条例により実施) ——からバラバラヤ地区 *R.W.* 2および *R.W.* 4のトラジャ人211世帯に関する資料を得た。もう一つは，必ずしもバラバラヤ地区だけにはかぎらなかったが，全部で45人のトラジャ人に対して，ムランタウとこの町での生活について自由に語ってもらうという形で，1回1–2時間程度の面接調査を試みた。以下において，この2種類の情報をもとに，ウジュン・パンダンのトラジャ社会の問題点を，いくつかの項目にわけて示してみよう。対象も内容も多岐にわたる面接調査[12]の結果は，この論述に必要なかぎりもり込むことにし，以下のアルファベットのイニシャルは，面接調査を行なったインフォーマントを指す。

11) この単位は，近年まで "*Rukun Kampong*" (*R.K.*) と呼ばれており，現在でも慣習的にそう呼ばれることもある。名称の改正の理由は，「カンポン」という語が「村落」の意を含むことから，「都市」「開発」というコンテクストにふさわしくないということで，「ウィラヤ」(領域) というニュートラルな用語があてられたと思われる。

12) 面接調査を行なった45人について以下におおざっぱな情報を与えておく (括弧内の数字は人数)。性別：男(39)，女(6)；年齢別 (1984年当時)：20代 (7)，30代 (8)，40代 (9)，50代 (14)，60代 (5)，70代 (2)；職業別：公務員 (11)，無職 (8)，企業従業員 (6)，年金生活者 (3)，教会関係者 (3)，学校教師 (3)，大工 (2，うちひとりは棟梁で木工所経営)，華人レストラン料理人 (2)，大学生 (2)，靴製造会社経営，靴直し，溶接工，建設業請負，軍勤務，各1；ウジュン・パンダンへの移住年 (ウジュン・パンダン生まれのひとりを除く)：1920年代 (1)，30年代 (4)，40年代 (12)，50年代 (10)，60年代 (9)，70年代 (4)，80年代 (4)；ウジュン・パンダンでの滞在年数：0–5年 (4)，6–10年 (3)，11–20年 (6)，21–30年 (11)，31–40年 (12)，41–50年 (7)，51年以上 (2)。

移住の背景

ウジュン・パンダンへのトラジャ人の移住（ムランタウ）は1920年代に遡るといわれる[Abustam 1975: 2]。初期の移住者の多くは植民地行政下の警察官やキリスト教会関係者であったらしい。けれども，S（1914年生まれ，男性）が次のように語ったことが印象的である。その時，彼はまだ少年であったが，「広い世界」をみたくてたまらず，親には内緒で，トラジャに来ていた中国人商人についてマカッサル（ウジュン・パンダン）へ出てきた。1927年のことである。当時は，陸路ではなく海路の旅で，トラジャの市場町ランテパオよりパロポに降り，そこから船でいくつかのブギス・マカッサル人の港に立ち寄りながら，この町にたどりついた。町では中国人の家に住み込み，商店の手伝いをして生活した。のちに，彼は独立して自転車屋を始めるが，数年前，年をとって引退するまで，これが彼のこの町での職業であった。少し時代を下れば，特に有力者の子弟が教育を受けるためにウジュン・パンダンへ出てくるというパターンがあらわれる。例えば，日本時代(1942-1945年）には，スラウェシの有力者の子弟を集めた「特別中学校」が設立されており，PやLはそこで学んでいる。

しかしながら，トラジャ人のムランタウが顕著になるのは，インドネシアの独立後，それも特に近年（1960年代後半）になってからのようである。これには，基本的に二つの理由が考えられる。第1は，内的なもので，ホームランドであるタナ・トラジャ県(Kabupaten Tana Toraja)の生態学的な理由である。別のところで検討したように[山下 1982：374-377]，彼らの土地は，山地という条件を考慮する時，増え続ける人口を吸収しきれなくなっているわけで，この生態学的な圧力が若者層を中心にした人口を県外に押し出している。第2は，外的なもので，1965年以降のスハルト新体制下の政治秩序の安定，交通網の整備，およびその「開発」(*pembangunan*)の精神と関係した社会の拡大である。こうした内的・外的な理由から，今日，タナ・トラジャでは，Mがいうように「移住者を出していない家族はない」。県住民の約3分の1にあたる約10万人の人口が，ウジュン・パンダンをはじめとするスラウェシの各地，あるいはカリマンタン，ジャカルタ，さらにイリアンにいたるインドネシアの各地にムランタウに出ていると推定される。

「新しい経験」と職業

面接調査において人々にムランタウの動機を尋ねると，「仕事を捜しに」とか「教育を受けるため」と答えるのがふつうである。けれども，これは，原因というよりむしろ結果であって，実際のところ，ムランタウに出るに際してそれほど明確な目的があるわけではない。1年前（調査当時）にこの都市に出てきたというR（1962年生まれの女性）がいうように，「ただ来てみただけ。そのかたわらに，仕事を捜している」という形はかなり一般的であると思われる。あるいは，すでにみたようにムランタウの潜在的可能性は常にあるわけで，それが顕在化するのは，Jがいうように，ムランタウから帰ってきた友人や親族の話を聞き希望に胸を膨らませる時である。いわゆる都市の「きらめき説」である[中村 1984：19]。彼らの言葉では「新しい経験を求めて」(*cari pengalaman baru*)という。こうして，さしあたっては，まず親戚や友人宅にいそうろうする。そうして新しい町を経験しながら，うまく職（あるいは教育）にありつければとどまることになるし，そうでなければ村に戻る。このパターンはしばしば何度か繰り返される。

「新しい経験を求めて」といっても，彼らの経験追求はきわめて緩慢である。さきほど

のRは，筆者が下宿していた「祖母」Q（実際には彼女の父の母のイトコ）の家にいそうろうしていたが，彼女はこの家族の家事手伝いに1日の大半を費やし，これでは「村の生活と全く変わらない」と笑う。外出といえば，市場に買い物に行くか，日曜日ごとに教会へ行く程度で，彼女をみているかぎり，積極的に町を経験するというイメージからはほど遠い。もっとも，この例は，彼女が女の子だということも考慮されるべきであろうし，個人差もあろう。しかし，一般にこの都市のトラジャ人は，彼らのいう「他者の国」(*tondok tau*) にあって，遠慮がちにいささか自閉的に生きているという印象を受ける。Bはいう。「実のところ，われわれは他の民族に心を開いてつきあったことはない」。

ウジュン・パンダンのトラジャ人の職業のステレオタイプは，「男は靴屋 (*tukang sepatu*, 靴直しといった方が正確か)，女はお手伝い (*pembantu*)」というものである (cf. Abustam [1975; 1977])。けれども，これはトラジャ人のすべてが靴屋またはお手伝いというわけではもちろんない。住民票資料からバラバラヤ地区 (*R.W.* 2 および *R.W.* 4) のトラジャ人211世帯の世帯主の職業は，表1のように整理される。ここでは，日雇い (*buruh harian*) が最も多く47人 (22.3%) を占め，次いで学校教師や警察官も含む公務員 (*pegawai negeri*) 40人 (19.0%)，トゥカン／職人 (*tukang*) 34人 (16.1%)，企業従業員 (*pegawai/karyawan swasta*) 26人 (12.3%) と続いている。トゥカンに関しては，ここでは，大工 (*tukang kayu*) が多く，靴屋は3例にすぎない。この表に示される就業状況はいくつかの点で興味深いが，ここでは次の2点を指摘しておく。第1に，日雇いと公務員というある意味で対比的な職業が上位1，2位を占めるというのは，ウジュン・パンダンという町全体の就業構造を反映している。すなわち工業部門の吸収力が依然弱く，仕事にありつくといえば，日雇いか公務員かという状況が基本的にある。第2に，残余の部分は，トゥカン，サービス業，あるいは小商人といったいわゆるインフォーマル・セクターを構成し，この部分が活気に

表1　バラバラヤ地区トラジャ人の就業状況（居住区 *R.W.* 2 および *R.W.* 4 の211世帯の世帯主の職業——居住区長の保管する住民票より抽出）

職　　種	人数	注記（括弧内は人数）
日雇い (*buruh harian*)	47	
公務員 (*pegawai negeri*)	40	学校教師(7)，警官(1)を含む
トゥカン／職人 (*tukang*)	34	大工(21)，溶接工／修理工(9)，靴屋(3)，鍛冶屋(1)
企業従業員 (*pegawai/karyawan swasta*)	26	
軍役 (*A. B. R. I.*)	10	
年金生活 (*pensiunan*)	10	
大学生 (*mahasiswa*)	9	
雑役・サービス業 (*sektor jasa*)	7	ホテル・レストラン従業員(3)，店員(2)，夜警(1)，運転手(1)
小商人 (*jualan, penjual*)	5	肉団子 (*nyoknyang*) 売り(2)を含む
民間医療師 (*dukun*)	1	
無職	16	主に寡婦の場合
不詳	6	
計	211	

みちた町の風景を作り出しているという点である。フォーブスによると，ウジュン・パンダン全体では就業人口の75%以上がこの「インフォーマル・セクター」に属するという[Forbes 1978: 67]。

上記の第2の点は，民族集団との関連において興味深い。ここでは，靴屋や大工はトラジャ人，ベチャ屋（*tukang beca*，輪タク）はマカッサル人，裁縫師（*tukang jahit*）はバンジャール人，床屋（*tukang cukur*）はマドゥラ人，ラーメン屋（*penjual mie*）と氷売り（*penjual es*）はジャワ人といった民族集団による分業が認められる[Hamid, A. 1983: 70]。こうした民族集団による分業といった状況のなかで，トラジャ人の「靴屋」は実際には彼らの職業としてそれほど大きな比率を占めるわけではないが，「トラジャ人は靴屋」というステレオタイプが形成されることになる。職業はここでは「エスニック・マーカー」としての機能を果たしているわけである。

「靴屋」や「大工」といった仕事は，彼らがもともと中国人から学んだものらしい。つまり初期（オランダ時代）の移住者の多くは，オランダ人のところに住み込んで下働きをするか，すでに挙げたSの例に窺えるように，中国人のもとで働いて生計を立てていた。後者の場合，なかには独立してYのように小さな靴製造会社を経営する者や，Dのように大工の棟梁（*pengawa*）になり木工所をもつ者もいる。今日でも華人は，商店や会社の従業員として，トラジャ人を好んで採用する傾向がある。トラジャ人は，ブギス人やマカッサル人と違って，従順でまじめによく働くという。トラジャ人の方も，華人は食事（豚肉を食べる），宗教（非イスラム教——今日キリスト教徒の華人も多い），勤勉さにおいて，自分たちに似ているとみている（Bの発言）。逆に，特にブギス人は，その「独立の精神」（*semangat merdeka*）からして人に使われることを好まず，サロン1枚の身でも果敢に商売を始めるという。汗水たらして働くことは，彼らにはむしろマイナス・イメージなのである。

この民族集団による仕事に対する態度あるいは観念の相違は大変興味深く，将来の十分な研究に値するが，さしあたって次の2点に留意しておこう。第1は，「靴屋」というトラジャ人の職業をブギス人は蔑みの眼でみているということで，それは「足」（下）にかかわる職業だからという。ブギス人ならば，「頭」（上）に関係したソンコ（*songko'*，帽子）を売るであろう，と。第2は，トラジャ人は商人の伝統をほとんどもたないという点である。例えば，市場（*pasar*）の商人は大部分がブギス人かマカッサル人であって，トラジャ人がいることはほとんどない。ブギス人が，開墾地でさえ，「商人的」にやってゆくのに対し[Tanaka 1982: 92–93]，トラジャ人はこの「商業の町」で田を耕すかのような勤勉さで，いってみれば，「農民的エトス」に支えられて生きている。

教育：マイノリティの生存戦略と現実

トラジャの若者がこの町に出てくるもう一つの動機は，学校教育，特にホームランドではみたされない高等教育を受けるというものである。仕事という点では，今日ウジュン・パンダンへ出るよりは新しい工場プロジェクトが進められている地域，例えばカリマンタンのサマリンダやバリクパパンなどに行った方がよいわけで，この町に来る動機として教育が占める比重は高い。この教育を受けるという点で彼らは，町のマジョリティであるブギス人やマカッサル人よりも熱心である。因に，この町にある国立ハサヌディン大学では，ある年に登録した学生の約30%がトラジャ出身であったという。これは住民比率からすれば大変高い数字である。

この教育への熱心さは，彼らがしばしば口

にするように，そのホームランドが山地に位置しているための不利性 (*daerah minus*) ならびにこの町で彼らがマイノリティであることを考慮したうえで，「生存のための戦略」として選びとられているように思われる。親は子供に「遺産」(*warisan*) をわけるかのように，できるだけの教育を与えようとする。つまり，Nがいうように「(ホームランドの) 土地はもってゆくことはできないが，教育はどこへでももってゆける」。

とはいえ，たとえ「大学出」の肩書きを得たとしても，[13] 就職戦線においてマイノリティである彼らが不利な立場におかれていることには変わりはない。さらに，宗教の問題がある。トラジャの移住者のほぼ100％がキリスト教徒であるのに対し，この町のマジョリティはイスラム教徒である。公務員の採用においても，こうした民族・宗教の問題は微妙に影響するという。そして，かりに採用されたとしても，「昇進」の問題がある。トラジャ人のこの町における地位は一般に高いものではないので，たとえ彼が有能な人物であったとしてもいわば「引き」のコネがないのである。こうした状況のなかで，大学の卒業を前にしたふたり（HとT）は，いずれもウジュン・パンダン以外の土地——ひとりはパル（中部スラウェシの州都），ひとりはクパン（東インドネシア，ティモール島）——での就職を考えていた。

都市の家族：村落の家族との補完性とトラジャ人内婚

都市の家族は村落の家族とさまざまな点で補完的な関係にある。単純化していえば，都市の家族は，若者が中心でいわば「ネネッ」(*nene'*，祖父母あるいは祖先）を欠いているのに対して，[14] ホームランドの村落の家族は，逆にしばしば若者を欠き年寄りと子供たちから構成されている。この場合，両者の関係は密接で，交通事情がよくなった現在，往来は頻繁である。この二つの家族を統合する機会は，特に葬儀の機会で，外に出ている若者たちも，親や祖父母の葬儀に参列するために，村へ戻るわけである。この葬儀をめぐる問題については，のちに再びとりあげる。家族・親族の統合のシンボルは，トンコナン (*tongkonan*) と呼ばれる船型屋根をもった特徴的な彼らの慣習家屋である。理論的には，トンコナンを建てることは，移住地においても可能だというが，ウジュン・パンダンには現在のところトンコナンは創設されていない。[15] 「祖先の座所」としてのトンコナンは，依然として彼らのホームランドに位置している。

都市の家族の現象形態を示すものとして，住民票資料から得られたバラバラヤ地区のトラジャ人211世帯の例は，表2に整理される。世帯成員の平均値は6.8人で，この数値は，

13) ウジュン・パンダンの地方新聞には，結婚や葬儀の広告と並んで，大学の卒業を祝う記事が卒業生の家族・親族から寄せられる。「大学出」はそれほどに一族の名誉であり稀少価値ではある。

14) 移住者が年をとると，老後はホームランドですごすというパターンが少なくとも近年までは認められた。このパターンは，トラジャ人たちがこの都市で借家ではなく持家を得ることによって現在くずれつつあるが，それでも，ホームランドの方がすごしやすいという考え方が若者の間にさえある。

15) この理由の一つとして，面接調査を行なったインフォーマントたちが指摘するのは，「他者の国」でのエスニック・アイデンティティの強調は他の民族からの反感を買うというものである。けれども，市街地のはずれにあるキリスト教墓地や町中の「カンポン」地区にあるトラジャ人学生寮には，トラジャの慣習家屋のモデルが見出され，慣習家屋と同様な形をもつ米倉を住居のそばに建てたトラジャ移住者もいる。他方，トラジャ人ではなく中国人が，観光上の目的から，トラジャの慣習家屋の形をとり入れた高級ホテルを近年海岸近くの一等地に建てた。

表2 バラバラヤ地区トラジャ人の家族形態（居住区 *R.W.* 2および *R.W.* 4の211世帯——居住区長の保管する住民票より抽出）

（1） 家族成員数

成員人数	1	2	3	4	5	6	7	8
世帯数	2	14	14	23	23	27	29	13

	9	10	11	12	13	14	平均 6.8人
	15	24	15	6	4	2	計 211世帯

（2） 家族の現象形態（類型の設定は筆者による）

形態	事例数	注記
核家族プラスα	116	αは世帯主／配偶者のキョウダイ，イトコ，オイ，メイなどの「いそうろう」
同上変形型	17	寡婦（寡夫）とその子供プラスα，および夫婦プラスα
核家族	57	
同上変形型	4	寡婦(寡夫)とその子供
夫婦のみ	7	
キョウダイのみ	4	
「クルアルガ」(*keluarga*)	3	「クルアルガ」はイトコなど何らかの親族関係にある者
独身	2	
不詳	1	
サンプル合計	211	

ホームランドのものより若干高い（因に，ホームランドでは1975年の統計で，平均5.3人）。その理由は次の都市の家族の形態と関係していると思われる。すなわち，家族の形態として最も頻繁にあらわれるパターンは，筆者が「核家族プラスα」と名づけるタイプである。この場合，αとは「いそうろう」(moving-ins) であって，夫婦のキョウダイ，イトコ，オイ，メイ，時には「孫」（キョウダイの孫も含む），まれには父もしくは母などである。こうして，結婚したばかりで子供がひとりしかいなくても，「いそうろう」を含めると，同居人は8人というケースもある。あるいは，筆者が下宿した家族の場合，世帯主Qは夫に先立たれた寡婦であったが，ここには，「オイ」（イトコの子）と3人の「孫」（前述のR，H，T）の計5人が同居し，加えて近くに住む妹とイトコがかなり頻繁に泊まりに来ていた。こうした家族形態を「拡大家族」と捉えることは可能であるが，そうすると「いそうろう」の問題性が消えてしまうし，イデオロギー的に都市では拡大家族が理想とされるわけでもない。他方，ホームランドでは「核家族」がドミナントだといえるが，広義のマレー社会においては「核家族」の問題も大変複雑なので（cf. 坪内・前田[1977]），ここでは深入りを避け，現象上の指摘にとどめておきたい。

ここでいう「核家族プラスα」というパターンは，変形型——寡婦（まれに寡夫）とその子供たちプラスα，あるいは子供のいない夫婦プラスα——を加えると，133例（63.0%）にのぼる。いそうろうの多くは，教育を受けるため，職を捜しに，あるいは新しい経験を求めてこの町にやってきた新参者たちである。都市の家族は，村落の家族からこうしたいそうろうを受け入れることを期待される。住宅事情が悪いなかにあって——1軒の家（2階建ての大きな家ではあるが）を細かく仕きって19世帯72人住んでいるケースもある——，これは大変な負担になることもあるが，両者の補完的関係のなかで面接調査を行なった多くのインフォーマントがいうように「拒否することが難しい」。逆に，いそうろうをする側にもリシプローカルな貢献が期待され，女子であれば前述のRのように家事を，男子であれば家主の仕事を手伝う（特に大工などのトゥカンの場合）という形がみられる。

婚姻について，トラジャ人同士の結婚が，

以前に比べると減少しているとはいえ，今日においても依然支配的である。住民票資料でいえば，211世帯のうち，166例（78.7%）がこのケースである。トラジャ教会バワカラエン支部の資料では，1981年6月から1984年8月の間にこの教会で結婚したトラジャ人145組のうち，61組（42.1%）が明らかにタナ・トラジャ県出身者同士の結婚である。この新しい世代の結婚においてはトラジャ人内婚の比率は減少しているが，今日ではウジュン・パンダン生まれのトラジャ人の結婚も多いことから，「トラジャ人内婚」ということでは，この数字はもう少し高くなるはずである。[16] 1970年代前半では，1971年から1975年にかけての484組の結婚のうち，431組（89.0%）がトラジャ人同士の結婚である（ウジュン・パンダン市内全域のトラジャ教会の資料を用いたアブスタムの調査による [Abustam 1975: 75–76]）。こうしたスク（*suku*，民族集団）内婚の理由として，次の2点を挙げることができる。第1は，宗教的な理由である。すでに示唆したように，トラジャ人はキリスト教徒であるのに対し，他の民族集団の多くはイスラム教徒であって，彼らは結婚に際して宗教上の違いを避けようとする。したがって，彼らがトラジャ人以外と結婚する場合，その相手は，アンボン人，フローレス人，あるいはメナド人といったキリスト教徒であることが多い。第2に，とりわけトラジャ人の男性がブギス人やマカッサル人の女性と結婚することはまれだといわれるが，これは，南スラウェシにおいては一般に身分の高い女性は身分の低い男性と結婚してはならないとする婚姻規則があり，トラジャ人がブギス・マカッサル人から「低く」みられているためである。因に，住民票資料では，45例のトラジャ人／非トラジャ人の婚姻のうち，トラジャ人男性が非トラジャ人女性と結婚したケースは9例（20%）である。

16)「トラジャ人内婚」は年を追って統計的には減少の傾向にあるが，これは，ここに示唆したように，統計技術上の問題——インドネシア政府が民族集団別の統計をとらないことから，例えばウジュン・パンダン生まれの場合，当事者の出身民族集団がわからない——にもよる。

互助組織：都市のなかの村落社会

1920–1930年代，この町のトラジャ人がまだ少なかったころ，「ブンガ・ララン」（*Bunga' Lalan*: トラジャ語で「道を開く」という意で，いってみれば「パイオニア」）と呼ばれる一種の「県人会」あるいは互助組織があった。この組織は，現在のバワカラエン教会（Gereja Bawakaraeng，この町でもっとも古いトラジャ人の教会）の場所にあった家屋に事務局があり，その家はトラジャ人新参者にとっての情報センター，宿泊施設でもあった。それはあたかもウジュン・パンダンにおける「トンコナン」（一族の家）のごとくであったという。もっとも，この組織は1940年代までにはトラジャ教会（Gereja Toraja）のなかに発展・解消され，教会が県人会的機能を果たしていた時期がしばらく続く。

トラジャのキリスト教徒にはカソリックもいるが，大半はプロテスタント系で，トラジャ教会に統合される。この都市へのトラジャ人移住者の数が増えるにつれ，今日教会はいくつもの支部にわかれるが，それぞれの支部は，この都市のトラジャ人たちの日曜日ごとの会合の場，情報交換，さまざまなレクリエーション，さらに相互扶助という点で社会的に重要な機能を果たしている。さらに，今日では，クルクナン（*kerukunan*）と呼ばれる互助組織が，ホームランドの出身地域（あるいは出身村）ごとに作られている。例えば，クルクナン・ノノンガン（ノノンガン村人会）というように。この互助組織は，とりわけ都

市において葬式を出す場合に重要な機能を果たす。葬儀はホームランドのトラジャの社会と文化を理解するうえで戦略的といってよいほどの重要性をもつが [山下　1979]，都市部においても，トラジャ人同士のつきあいの重要な機会を提供するわけである。

この互助組織に関してもう一つ興味深いことは，就業の分野において見出される。すなわち，前述の靴屋や大工の棟梁が職人たちを組織する場合，このクルクナン組織が重要な機能を果たし，例えばDの木工所「ウサハ・トゥナガ・ボリ」(Usaha Tenaga Bori，ボリ職人会社——机やイスなどを製造）のように，特定の村落（ここではボリ）の出身者の何人かの職人によって小さな会社が形成されることになる。こうして，ある意味で，ウジュン・パンダンにホームランドのトラジャの村落社会の「ミニアチュア」が見出されることになるわけである。

「儀礼問題」：文化のインボリューション

トラジャの移住者の間には，彼らが「儀礼問題」(*masalah pesta*) と呼ぶ問題がある。これは，少なくとも今日のトラジャのムランタウが直面する最も大きな，また最も興味深い問題領域といってよいであろう。簡単にいえば，こういうことである。1970年代に入って，トラジャ社会は顕著な空間的拡大をみたが，この社会のセンターは，依然としてホームランドの「祖先の家」(トンコナン）にあり，移住地／都市で稼いだ金の剰余は，ホームランド／村落において，とりわけ「祖先の家」を改築・新築したり，そこで儀礼・祭宴を執行することによって使われる。トラジャの儀礼，とりわけ死者に関する儀礼の執行は，地位・威信・面子といった観念と密接に結びついているので [同上論文]，移住地での「成金」はあたかも故郷に錦を飾るように，ホームランドの儀礼に金を注ぎ込むことになる。こうして，1970年代のトラジャのホームランドにおいてはこの外部から流入する富によって，「伝統的」な儀礼・祭宴がなくなるどころか，むしろ活性化し（文化のインボリューション），トラジャ版「ルネッサンス」といってよい状況がみられた。[17]

この問題は，1970年代のトラジャ人の「文化的アイデンティティ」に深くかかわっている (cf. Volkman [1984])。つまり，人々は外界に出ていったけれども，彼らは「他者の国」で自らのアイデンティティを実感することはできない。この状況は次の挿話によく窺える。「ウジュン・パンダンの町で，あるトラジャ人がコーヒー屋 (*warung kopi*) に座っていた。なかなかコーヒーが来ないので，彼はいらついて店主にいった。『俺を誰だと思っているんだ。俺は親父の葬式で60頭もの水牛を殺したんだぞ』。店主はブギス人で，そのトラジャ人をじっとみつめていった。『この馬鹿野郎が！』」[Volkman　1980: 79–80]。トラジャ人の「儀礼問題」はウジュン・パンダンの他の民族集団もよく知るところである。けれども，他の民族はそれを「愚かな慣習」としかみなさない。[18] こうした状況のなかで，ムランタウに出たトラジャ人は再びホームランドに引き寄せられるのであって，「祖先の家」

17) この「ルネッサンス」のもう一つの要因は，インドネシア政府の観光政策である。これについては，拙稿参照 [山下　1985 a]。また，「文化のインボリューション」という概念は，フィリップ・マッキーンが観光開発のもとでのバリの文化動態を理解する際に用いたものである [McKean　1977]。

18) トラジャ人自身も，彼らの儀礼・祭宴の「浪費的」側面を指して，「愚かな慣習」を云々することがある。けれども，彼らのいう「愚かさ」は，自らのアイデンティティとの間にあって屈折した形をとるという点で，他民族のいう「愚かさ」とは当然異なる。彼ら自身は，この「愚かな慣習」の当事者になるなかで，大変生き生きとしてくるのがふつうである [山下　1985 b]。

を中心とする儀礼・祭宴の執行は，移住地／都市の家族とホームランド／村落の家族を，若者と祖先を，また近代と伝統を，媒介しつつ統合するわけである。

移住地で死者が出た時は，ホームランドに遺体が運ばれ，そこで葬儀がもたれることもあるが，多くの場合は，前述の互助組織をベースにした葬式が行われ，キリスト教徒の墓地に埋葬される。この都市での葬儀のあり方は，村落／ホームランドで行われるような多数の豚や水牛が供犠される盛大な死者祭宴(cf. 山下 [1979]) とは当然異なるが，ウジュン・パンダンという都市空間のなかで，彼らの葬儀の風景は明らかに異質である。調査期間中，筆者はそうした葬儀の一つ——30歳ばかりのマカレ（ホームランドであるタナ・トラジャ県の県庁所在地）出身の青年の葬儀——に出くわした。通夜には，住居の前に多数のイスが並べられ，参集した弔問客に軽食と飲物がふるまわれ，ホームランドにおけるように葬歌 (*ma'badong*) を歌うサークル・ダンスの輪が広がる。翌日，牧師の祈禱，賛美歌の合唱，遺族代表の挨拶などがとり行われたのち，夕方，遺族の女たちの激しい儀礼的涕泣 (*umbating*) を残して，車で町はずれのキリスト教墓地まで運ばれる。弔問客たちも，おのおのチャーターした軽トラック，ミニ・バスなどに分乗して，墓地にむかう。この葬儀の場合，車の数は100台を越えており，この車を連ねての葬列は，あたかもホームランドでの水牛を連ねての葬列のごとくであった。実際，ホームランドでの葬儀の規模が水牛の供犠頭数で語られるように，都市の葬儀の盛大さは葬列に参加した車の台数で語られ，車のチャーター代は，ホームランドの葬儀における弔意をあらわす豚の贈与に等しいと考えられている。

IV 結　　語

これまで検討してきたウジュン・パンダンのトラジャ社会の事例をより一般的な角度から捉え直すことによって，本論に小結を与えておこう。

第1は，本論の課題であった都市とその後背地，あるいは都市の社会と村落の社会の関係についてである。ここで検討した事例が示すところでは，移住（ムランタウ）とは社会の「近代化」とか「都市化」という形で捉えられるというよりは，ホームランドの生態学的な圧力を背景とした一種の「エスニック・イクスパンション」と考えられ，その結果いわばホームランドの「飛び地」があちこちにできることになる。これが移住民社会である。この場合，家族の形態においてみたように，都市と村落，移住地とホームランドの関係は補完的であり，二つの異なった社会というよりは「一つの社会の二つの部分」である。[19] さらに，クルクナンと呼ばれる都市の互助組織のありようは，ウジュン・パンダンのトラジャ社会がホームランドのミニアチュアであるかのような様相を呈している。ここにおいて，移住地は中心であるホームランドの社会のいわば「出先」と考えられているわけで，この先端部分は，とりわけホームランドでの儀礼の執行を通して中心へと引き戻される。1970年代のホームランドの伝統的儀礼の「ルネッサンス」は，この内から外へ，また外から内へという二重の運動を抜きに考えること

19) 同様な観点は，ブギスの移住民社会の研究においても指摘されている [Lineton 1975: 1]。ただし，あるブギス人インフォーマントは，彼らのムランタウのパターンはミナンカバウ（あるいはトラジャ）と異なり，「行ったら戻ってこない」ことを強調した。賢いブギス人は外での成功を目指して出てゆくし，戻ってくるとしたらそれは彼が無能だからだ，と。

はできない。こうして，都市／移住地の社会と村落／ホームランドの社会はともに一つの時代を共有するといえる。都市の社会が「近代的」というなら，その分だけ村落の社会もそうなのであって（逆に，村落の社会が「伝統的」なら，その分だけ都市の社会もそうである），都市対村落の対立を，近代対伝統，あるいは性格の異なった社会のタイプの対立としてみるわけにはゆかない。

第2は，この町のトラジャ人の性格，特にその「農民的エトス」という問題である。ブギス人である筆者の調査助手は，この町のトラジャ人を評して「黙する人」(*pendiam*) という。つまり，ブギス人の眼からすると，彼らは黙々とよく働く。逆に，トラジャ人の方は，ブギス人を評して「虚言をはく人」(*orang omong kosong*) という。彼らは口はうまいが，商売人，遊び人であって，信用できない，と。この「黙する人」と「語る人」という対比は，田舎性と都市性，農村的伝統と商人的伝統の対比を示しているようで興味深い。現在筆者は田舎性／都市性をわかつ一つの基準として言語に対する態度という問題を重要だと考えているが，[20] この基準からするとトラジャ人は明らかに「田舎者」である。このことは，彼らはこの町の新参者で，都市の周辺部のカンポン・セクターの住民であること，さらに彼らの間に一般に商人が見出されないこと，と対応している。

第3は，ウジュン・パンダンというポリエスニックな移住民社会の性格に関することである。この町に住む人々はしばしば自らを「ウジュン・パンダン人」(*orang Ujung Pandang*) と呼ぶ。けれども，この人々に対応するような「ウジュン・パンダン社会」，「ウジュン・パンダン文化」といったものは存在するのだろうか。別のいい方をすれば，ウジュン・パンダンという都市は，一つの「モラル・コミュニティ」（価値もしくは「われわれ意識」を共有する共同体）として存在するのだろうか。本論で検討したトラジャ人の視点からいえば，答えは否定的である。トラジャ人は基本的に，この都市にというより「拡大したトラジャ社会」のなかにひっそりと住んでいるかのようである。彼らにとってウジュン・パンダンという町は，生活のための一つの「背景」にすぎない。さらに，先にウジュン・パンダンのトラジャ社会はホームランドの村落社会のミニアチュアといったけれども，ウジュン・パンダンという都市自体，基本的には南スラウェシのさまざまな民族社会（文化）のミニアチュアの「寄せ集め」であり，極論すれば，この都市に実在するのは，「トラジャ社会」であり，「ブギス社会」であり，「マカッサル社会」なのではないだろうか。つまり，ある地理的な広がりのなかに，ある人々がいて，その社会と文化が，あたかも統合された全体としてあると考える必要は必ずしもないのである [船曳 1985；山下 1985a]。

上記の第3の論点は，未だ示唆的な問いにとどまっているが，さらに二つの問題に関連している。第1は，都市の社会人類学的なアポリアとでも呼ぶべきものである。つまり，本論で示したように，このウジュン・パンダンという都市のトラジャ社会に着目してゆくと，この都市が背景に退いて，むしろ都市社会の全体がみえなくなるということを，どのように考えればよいのだろうか。都市と村落の社会学的な相違については，さまざまに論

20) この点で，小松和彦の「物ぐさ太郎」の民話についての指摘が興味深い。都へ出た物ぐさ太郎は，はじめは村での美徳である「沈黙」と「勤勉」を実践しようとするが，うまくゆかない。そこで，「言語」と「遊び」の精神で迫ってゆくと成功する [小松・立松 1984：111-121]。つまり，都市と村では，言語に対する態度，勤勉と遊びに対する価値付与は異なっているわけである。

じられてきているが，本当に都市の社会と村落の社会は違うのか。社会関係を追ってゆけば，アブナー・コーエンもいうように「ロンドンも一つの村である」[Cohen 1974: xix]とさえいえるのである。人が，伝統社会であれ近代社会であれ,「真のわれわれ」という範疇を常に設定して生きてゆく社会的存在であるかぎり (cf. Leach [1982: 60, 118]),「都市性」は社会学的 (少なくともミクロ社会学的) には定義できず，何か別の次元で考えられるべきかもしれない。第2は，エスニックな境界に関することである。いうまでもなく，この境界は，固定して考えるべきではない。ウジュン・パンダン生まれの人々や，他の民族と通婚した人々とその家族においては，エスニックなひだは，より微妙なものとなろう。さらに，インドネシアという国家が成立している以上，インドネシアの民族集団は，ある特定の「民族」であると同時にインドネシア人という「国民」でもあるわけで，人々は常に二重の（場合によっては多重の）アイデンティティをもつことになる。したがって，エスニックな境界は，どのレヴェルを強調するかで大きく変動することに留意する必要があろう。面接調査においてAがいうように,「われわれはこの町をわれわれの町だと感じ始めている」という水準もあるのである。

「われわれの町」——しかし,「われわれの」とは,「だれの」かと再度問い返す時，問題は一巡してもとに戻る。むしろ，ある意味で都市の主語がないことが，エスニック・モザイクあるいはプルーラリズムによって特徴づけられる，この都市の現在の特徴だと考えた方がよいかもしれない。こうした都市社会のありようは，人々・社会・文化を統合された全体と考えようとする伝統的な社会科学者の社会理解モデルとは異なったありようを示している。この点は，本論の冒頭に述べた「中規模社会」——「幻想」のモラル・コミュニティである国家と「実在」のモラル・コミュニティである村落社会の間に位置づけることができる——の特徴の一つとして，さらに注意深く観察される必要があろう。

謝　　辞

本論の骨子は，ユネスコ東アジア文化研究センター（1984年11月16日）および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（1985年1月18日）の共同研究会，さらに東南アジア史学会第33回研究大会（1985年6月15日，於：広島大学）において口頭で発表された。関係者各位の貴重なコメントに感謝する。また，インドネシアでの現地調査は，インドネシア学術局 (Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia) のご厚意により実現した。あわせて，感謝の意を表する。

参 照 文 献

Abustam, Muh. Idrus. 1975. Tukang Sepatu Toraja di Ujung Pandang: Suatu Studi Mengenai Proses Perpindahan dan Penyesuaian Cara Hidup di Kota. Ujung Pandang: Laporan Penelitian, Pusat Latihan Ilmu-ilmu Sosial.

———. 1977. Tukang Sepatu Toraja di Ujung Pandang. *Berita Antropologi* 9: 50–57. Jakarta: Universitas Indonesia.

Bruner, Edward M. 1973. Kin and Non-Kin. In *Urban Anthropology*, edited by A. Southall. London: Oxford University Press.

———. 1974. The Expression of Ethnicity in Indonesia. In *Urban Ethnicity*, edited by A. Cohen. London: Tavistock Publications.

Cohen, Abner. 1974. Introduction: The Lesson of Ethnicity. In *Urban Ethnicity*, edited by A. Cohen. London: Tavistock Publications.

Encyclopedia van Nederlandsch-Indië. 1918. Tweede Deel. 's-Gravenhage: M. Nijhoff.

Forbes, Dean. 1978. 'Peasants' in the City: An Indonesian Example. *The Southeast Asian Review* II (2).

———. 1979. The Pedlars of Ujung Pandang. Working Papers No. 17.

Melbourne: Center of Southeast Asian Studies, Monash University.

———. 1980. Production, Reproduction and Underdevelopment: Petty Commodity Producers in Ujung Pandang (Paper presented at the Jubilee A.N.Z.A.A.S. Conference, Adelaide, 12–16 May, 1980).

船曳建夫. 1985. 「人類学における記述対象の限定について——社会と文化の存在様相に関する考察とモデル (1)」『東洋文化研究所紀要』第97冊：55-80.

Geertz, Clifford. 1965. *The Social History of an Indonesian Town.* Connecticutt: Greenwood Press Publishers.

Geertz, Hildred. 1963. Indonesian Cultures and Communities. In *Indonesia*, edited by R. McVey. New Haven: HRAF Press.

Hamid, Abu., ed. 1983. Perkampungan di Perkotaan Sebagai Wujud Proses Adaptasi-Sosial: Kehidupan di Perkampungan Miskin Kota Madya Ujung Pandang. Ujung Pandang: Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah 1982/1983, Direktorat Jenderal Kebudayaan, Direktorat Sejarah dan Nilai Tradisional.

Hamid, Pananrangi *et al.* 1984. Dampak Modernisasi Terhadap Hubungan Kekerabatan di Kota Madya Ujung Pandang, Sulawesi Selatan. Ujung Pandang: Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah 1983/1984, Direktorat Jenderal Kebudayaan, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.

加納啓良. 1982. 「インドネシア」『東南アジア現代史』滝川　勉他(編). 東京：有斐閣.

Kecamatan Makassar. 1984. *Kecamatan Makassar Dalam Angka Tahun 1983.* Ujung Pandang: Mantri Statistik Kecamatan Makassar.

小松和彦；立松和平. 1984.『他界をワープする』東京：朝日出版社.

Kota Makassar. 1956. *Buku Kenangan 50 Tahun Kota Besar Makassar.* Makassar.

Leach, E. R. 1982. *Social Anthropology.* New York; Oxford: Oxford University Press.

Lineton, Jacqueline. 1975. An Indonesian Society and Its Universe: A Study of the Bugis of South Sulawesi (Celebes) and Their Role within a Wider Social and Economic System. Ph. D. Thesis, University of London.

Mattulada. 1982. *Menyusuri Jejak Kehadiran Makassar Dalam Sejarah.* Ujung Pandang: Bhakti Baru-Berita Utama.

McGee, T. C. 1967. *The Southeast Asian City.* London: G. Bell and Sons Ltd.

McKean, Philip F. 1977. Towards a Theoretical Analysis of Tourism: Economic Dualism and Cultural Involution in Bali. In *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, edited by Valene L. Smith. Philadelphia: The University of Pennsylvania Press.

McTaggart, W. D. 1976. Kebijakusanaan Pembangunan Kota di Indonesia: Kasus Ujung Pandang, Sulawesi Selatan. *Masyarakat Indonesia* III (1). Jakarta: LIPI.

中村孚美. 1984.「都市人類学の展望」『都市人類学』(現代のエスプリ別冊，現代の人類学 2) 中村孚美 (編). 東京：至文堂.

Nooy-Palm, Hetty; and Mattulada *et al.* 1978. The Sa'dan Toraja in Ujung Pandang (Sulawesi, Indonesia): A Migration Study. Amsterdam: Koninklijk Instituut voor Tropen.

Reid, Anthony. 1981a. Southeast Asian Cities Before Colonialism. *Hemisphere* (1981): 144–149.

———. 1981b. The Name 'Makassar' (Typescript, 19 March, 1981).

Reksohadiprodjo, Sukanto. 1984. Tata Guna Tanah dan Pengembangan Perkotaan. *Prisma* XIII–6: 14–23.

Tanaka, Koji. 1982. Agricultural Adaptation by Spontaneous Migrants to Northern Kabupaten Luwu. In *Villages and the Agricultural Landscape in South Sulawesi*, edited by Mattulada and N. Maeda. Kyoto: Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

坪内良博；前田成文. 1977.『核家族再考』東京：弘文堂.

Volkman, Toby A. 1980. The Pig Has Eaten the Vegetables: Ritual and Change in Tana Toraja. Ph. D. Dissertation, Cornell University.

———. 1984. Great Performance: Toraja Cultural Identity in the 1970s. *American Ethnologist* 10: 152–169.

Walinono *et al.* 1974. Peta Sosiologis Kota

Madya Ujung Pandang. Ujung Pandang: Universitas Hasanuddin.
山下晋司. 1979.「『肉の政治学』——サダン・トラジャの死者祭宴」『民族学研究』44(1)：1-33.
————. 1982.「水田ミナンガ——サダン・トラジャの一枚の水田をめぐる社会人類学的覚書き」『東南アジア研究』20(3)：373-392.
————. 1985a.「動態的民族誌の可能性：社会人類学における研究対象の単位をめぐって」船曳建夫（研究代表者）『研究中間報告書：東南アジア・オセニア両地域の文化・社会の基層における比較と分析』東京：東京大学教養学部.
————. 1985b.「トラジャの『お葬式』——インドネシアの『開発』のなかの祭り」『教育と医学』33(8)：52-57(806-811).